大正十三年十一月五日發行
大正十四年六月十日再版

普及版
定價金參圓

編輯兼發行者　富山縣射水郡二口村　安吉教團代表者　石黒久義
印刷者　京都市開之町二條上ル　藤澤淨圓
印刷所　京都市丸太町川端東入上　同朋舍

版權所有

發行所　富山縣射水郡二口村　安吉教團

發賣元　京都市二條通寺町東入　博省堂
振替口座三七四一七番

四十八願講話（附錄の一）

一、序說——二、釋迦出世の本懷——三、本願は大經の生命——四、眞實の宗教——五、眞實無上の幸福——六、信の外に本願なし——七、信ずるに理由なし——八、自然の信——九、ねばならぬの撤廢——十、せずに居られぬ——十一、本願に望めて起す信——十二、本願とは何ぞや——十三、有聲の聲と無聲の聲——十四、何故に本願起りしや——十五、本願相應と不相應——十六、本願と我心——十七、眞實と虛僞——十八、佛心凡心一體——十九、四十八願分類——二十、今得る淨土の德。

一、序說

御約束によりまして、今日より四十八願の講話を試みやうと思ひます。本題に立ち入る前に先づ御斷りを致しておかねばならぬことは、私のやうなものが抑も四十八願を講じやうなどゝすることは柄にもない實に無鐵砲千萬な事でありまして又恐れ多いことの極みであります。よつて講話とはいひますものゝどてもまとまつた話は出來さうにもありませぬ。唯私の思ひついたまゝ、私の心に浮んだまゝを此四十八願の御言葉の上に味はひたいと思ふばかりであります。話すといふよりも寧ろ私自身喜ばせて頂きたいと思ふのであります。皆樣の熱心に引付けられて自分の分限もなにもうち忘れて、皆樣と共に如來の御心である、四十八願を恐れながら少しづゝ伺はさせて頂きたいと思ふばかりであります。

又今迄この四十八願に就て講じたものが少なく、又あつても充分にまとまつたものもなく、無論御開山や蓮如樣にも四十八願を講ぜられたものもなく溯つて七高僧にも御相承ににも、そうしたものもないので無學の私には一層其困難を增すばかりである事も御斷りをしておかねばならぬ事の一つであります。

唯如來の直々の御指圖といへば何だか一寸のぼせ切つたやうないひ分であるがまちがひ通しの私に一切を許して下さる、如來の大み心の前に私は大膽に思ひ

の儘を述べさせて頂きます。

さて四十八願といふのは、大無量壽經の中に說かれた四十八通りの本願のことである。今更いふ迄もなく一々の本願について之はあゝいふこと、此願はこういふことと言葉の上でそれぞれ說明することは何でもない、之までもそんな樣な書物も多く出來て居ますが、私はもうちつと生きたものとして說きたい。それについて根本的の話をしなければならない。高岡一の建物の元の高岡共立銀行の行舍を建て上げる前長い間の地固めをやつて居ましたやうに、凡て大きな建築をするには其地固めに手間どるやうに、此四十八願といふ大建築をなす前に、今此四十八願のお話をなす前に、充分にその土臺について、話さなければならない。

二、釋迦出世の本懷

親鸞聖人は正信偈中に「釋迦世に出興する所以は唯彌陀の本願海を說かんとなり」と仰せられてあります。釋迦如來世に出現したまひて五十年のあひだ、澤山の經を說かせられましたが、其目的、其の精髓は、唯此の彌陀の本願一つを說かんがためであつた、と仰せられたのであります。又御和讃にも「如來興世の本意には本願眞實ひらきてぞ等」又「如來出世の本意なる弘願眞宗にあひぬれば凡夫念じてさとるなり」とありて、釋迦如來の本意は唯この本願の眞實をひらくためである。又其の釋迦の本意たる本願にあひぬれば、如何なる凡夫も佛果の證りを開くことが出來るのである。本願にあふことが眞宗である。本願の外に眞宗はない。眞宗とは宗派の名ではない。本願を信ずる、これが眞宗である。兎に角、此本願は釋迦の本意であつて、一代敎の神髓であつて、佛敎の最後の目的は、この本願一つを信ぜしむにあるのであると、仰せられたのであります。

釋迦如來出世の本意唯彌陀の
本願一つとかんためなり

御和讃に如來出世の本意には
本願眞實ひらくといへり
本意なる弘願眞宗にあひぬれば
凡夫念じてさとるといへり

して見ますれば、本願一つをよく聞き開くことは、とりもなほさず、佛教全體を究むることであり、又宇宙の眞理全體を獲得することであるとも、いへるのであります。

されば一口に本願といへば、何でもないやうでありますが、如何に重且つ大なるものであるかを先づ心得おかねばなりませぬ。

三、本願は大經の生命

尊號眞像銘文の眞最初に「大無量壽經言といふは四十八願をときたまへる經なり」とあります。又敎行信證の敎卷には「大無量壽經、眞實之敎、淨土眞宗」とあります。

大無量壽經は上下二卷から出來て居て大部の經でありますが、四十八願は其中のほんの一部を占めて居るに過ぎませんが、然し此の四十八願が大無量壽經の眼目であり、生命であるのであります。故に大無量壽經とは四十八願を說きたまへる經と仰せられたのであります。又釋迦一代敎の中に大小顯密頓漸聖淨等、數限りなき法門を說かれたるも、其の敎の中の眞實中の眞實の敎とは、此大無量壽經である。大無量壽經の眞實たる所以は、大無量壽經には此四十八願が說いてあるからであります。例へば東京のあの廣大な千代田城の尊い所以は、其の中に一天萬乘の御天子樣がおはしますからであります。大無量壽經を千代田城とすれば四十八願は御天子樣であります。

大經は此本願を說く故に

四、眞實之宗教

近頃になつて、この眞宗といふことばを大分活きたる意味に、解釋するやうになつた事は、喜ばしい事であります。今迄眞宗といはゞ、單に宗派の名即ち現在日本にでも八家九宗五十何派と數ある中の一宗派の名とのみ思ひ、眞宗と聞くと直ぐお西かお東かと問ふのが普通であつて、東西本願寺の門徒に戸籍をおいてをる寺とか門徒の家を眞宗と解したり、又は眞宗ときくと直ぐ地獄極樂、爺々婆々愚夫愚婦、浪花節的說教を聯想し、この忌はしき聯想なしに眞宗とは何ぞやを考ふることが出來なかつたのである。

然るに近時漸く、信仰の機運熟し、眞實に親鸞聖人の教を讃仰する人多きを加ふるに至り、この教こそ眞實の宗教、即ち眞宗である事に氣付きたるやうになり

かの富士川博士の如きも、さきに「眞宗」といふ書の著作あり、近時また「眞實之宗教」を著はされ、眞宗を科學的に研究し、總ての宗教の中、眞實の宗教は親鸞聖人の宗教なることを闡明せられて居ります。博士が一昨年此會議所のこの壇で御話せられしも矢張り、眞宗即ち眞實之宗教といふことでありました。

それで眞宗とは何であるかといふに宇宙に於ける眞實の教である。世界に於ける眞實の宗である。此教の外に眞實の教がない。眞實の宗がない、と解すべきであります。何故なれば、大無量壽經には四十八願が說かれてあり、此四十八願は宇宙の眞實そのものであるからである。此宇宙の眞實である本願を聞けば、之を聞くものまた、眞實の利を得るからであります。即ち全人類に最上眞實の幸福を與ふる眞實の教であるからであります。

五、眞實無上の幸福

大經に「世に出興したまふ所以は道教を光闡し、群萌を拯ひ、惠むに眞實の利を以てせんと欲してなり」とあります。釋迦出世の本意たる本願眞實にあふ人は眞實の利を得るのであります。眞實の利とは眞實の幸福であります。吾人々類に最高無上の幸福が與へらるゝのであります。

御和讃に「本願力にあひぬれば、むなしくすぐる人ぞなき、功德の寶海みちみちて、煩惱の濁水へだてなし」と仰せられて、眞實の本願は、あへばあひ甲斐ある本願であります。遇ふても遇ふた甲斐のないのならば、それは本願でも遇ふたのでもありませぬ。眞宗に流れを汲んだといふても錢を取られるだけで、何の甲斐がないならば、それは眞宗でも本願でもありませぬ。又所謂「婆々嬶の遊びがてらの寺參り、巾着錢の減るばかりなり」であつては、千座萬座御寺へ參つても何の甲斐もない譯であります。それは眞實の本願に、あはぬからであります。眞實の本願にあへば眞實の利はたしかにあります。蓮如上人御文章に「一念に彌陀

をたのみたてまつる行者には無上大利の功德をあたへたまふこゝろを和讃に聖人のいはく、五濁惡世の有情の選擇本願信ずれば不可稱不可說不可思議の功德は行者の身にみてり」と仰せられてあります。本願を信ずれば、無上大利の功德が吾人の上に加へらるゝのであります。無上大利の功德とは、卽ちお救ひに預ることであります。念佛稱ふる身にさせていたゞく事であります。卽ち弘願眞宗にあひぬれば凡夫念じてさとるなりとある、これであります。信ずる一つで凡夫の儘でお助けにあづかることであります。如來のお心のなかにおさめ取らるゝことであります。信ずるとき救はれ、救はるゝとき、この無上大利の功德の主とさせて頂くのであります。信ずるといふことゝ、救ひといふことゝ、功德といふことは三つのやうであつて實は一つの事であります。信ずるとき救はるゝといはんよりは、寧ろ信ずること夫自身が救ひである。功德の主になつたのは救はれたのであるが、實は其功德といふも救ひ其ものゝ外に何物もないのであります。故に信ず

る儘が救であり、又其儘が無上大利の功德なりといふことも出來ると思ひます。

六、信の外に本願なし

本願を信せしめんの御本願

信の外には本願もなし

本願を信ずるとは、即ち四十八願を信ずることである。四十八願を信ずるといふても四十八願の一願一願の講釋をきいて理解することではない。もしそんな事でゞもあれば、我々の如き愚かなものは皆助からぬ事となる。

本願は四十八あれども、四十八を信ずるに非ず、唯一つを信ずるのである。其一つを信ずれば、即ち四十八を信じたるなり。若し其の一を信せざれば、いかに四十八願の一々をよく知りぬいてもそれは一願をも信じた人といへぬのである。

然らば其一つとは抑も何であるか、いはゞ本願である。如來の御心である。如來の御心とは私を救はんとの大慈悲心である。私を救ふとは私をして信せしむることである。私を救ふ佛ありと信せしむる外に本願はない。本願を信ずるとは、私をして信せしめずばおかぬとある、如來のお力を信ずるのである。お力を信ずるといはんよりも、寧ろ如來の本願力が信せまいとしても私をして信せざるを得ざらしむるのである。

信ずるとは何を信ずる、いはく本願を信ずる。本願とはいかなるお願ひか、いはく私をして信せしめんの願ひ、何だか循環して判らぬ樣だが、實は中々六かしい事なのである。元來我々にはこんな不思議な佛智や本願や願力を信ずる能力は少しも持つて居らぬのである。故に今日迄迷ひさまやうて來たのである。又現に全人類の大多數が悶へ苦しみ惑ひつゝあるも此の信ずるといふ能力一つを持たぬからであります。此信ずるといふ能力を持たぬ私に、たやすく信せしめんと願じつゝある如來を阿彌陀佛と名け、其願心を本願と申すのである。故に四十八願

といふても、この四十八ケ條を覺ねて來いといふやうな事ではなく、唯、我を信せよ、信ずる能力なき汝を其儘信せしめずばおかぬ、其儘なりで我れにまかせと四十八遍私を呼んで下されたのであります。これでも信じてくれぬか、これでもまかせぬか、こんな事もしてやるが信じてくれぬか、こういふ事も出來るが信じてくれぬかと、阿彌陀樣が四十八遍私にたのんでくだされたのであります。

御和讃に「信は願より生ずれば、念佛成佛自然なり」とあります。私共の胸に發る信心は如來の本願より發さしめたまふのであります。私をして信せしめんとの如來の一念が、私の胸に徹りぬいたのであります。正信偈には能發一念喜愛心、とあります。一念喜愛心とは、一念の信心のことであります。その一念の信心の我胸に發りしは、所謂「泣くは我れ涙の種は向ふから」でありまして、發つたのは私の胸の中ではありますが、發す能力を少しも持たぬ私の胸に、實際たしかに發つたのはこれ如來の我をして信せしめんの本願力によりて發さしめたまふためであります。

七、信ずるに理由なし

何故にそんな本願信ずるか

我信せずに居られぬゆゑに

宗教の必要、信仰の必要などを論ずる人もあるが、そんな必要論は餘り必要のない、不必要論ではないかとおもふ。なぜなれば、それは丁度御飯はなぜ食せねばならぬか、水はなぜ飲まねばならぬかを論ずると同じいからであります。

然し世には隨分宗教の不必要や信仰の無用論を主張する人も少くないから、そんな人のために、そんな輩に對して、否、宗教は必要である、信仰は是非獲得せねばならぬものであると論じ立てる必要もないではないやうにも思はれるが、實際はそんな事を論ずるは、餘程いらぬひまのある人か、しからざれば議論をして

飯食ふ人のする事であつて、少くとも私共のやうに自らも信じ又この信仰を求む
る人と共に、信味をあぢはうとするものにはそんな必要論などして居る餘裕は
すこしもないのである。

藥をのむことは必要である。飯を食ふことは必要であると論ずる人ありとせば
其人は醫者でもなければ、病人でもない、議論のために議論をして居る人である
空論の人である、屁理窟の人である。醫師は唯病人のために藥をもりて其病を愈
せばよいのである。病人は唯醫師に病狀を訴へて藥を呑めばよいのである。何
等そこに議論する餘地は少しもないのである。

又飯を食ふの必要ありやと論ずる人ありとすれば、其人は米を食ふ必要なき西
洋人か、然らざれば死人である。飢わたる人は、そんなことを論ずる必要も餘裕
もあつたものにあらず、唯米を求むる計りである。議論なんかして居るひまはな
い。命ちがけに求むる計りである。

大集經には「法をどく者は醫王の想をなせきくものは愈病の想をなせ」と說き
亦大智度論には「聽くものは渴飲のごとくせよ」と說けり。

お前はなぜ、そんな本願を信ずるか、何の必要ありて、そんな陰氣臭いお慈悲
とやらを信ぜねばならぬかと、人若し我に問はゞ、我は其人に答へん。何の必要
ありて信ぜしにあらず、如何なる譯ありて信ぜしにあらず、何の必要も理由もな
く唯信ぜしのみ、否信ぜざるを得ずして信じたるのみ。若し强て理由といへば信
ぜざるを得ざるが故に信ずといはんのみ。

然し病氣が苦になつたか、又は思ふ事のかなはぬ逆境に陷つたか、又死ぬ事
が苦になつたか、何か原因か動機がなくては信じられるものではなからうとは屢
々受ける質問であるが、それは人から問はれるばかりでなく、私は長いあひだ、
矢張り何かそうした因緣なしには信ぜられぬものだらうと思ふておりました。肺
病は獲信病といふから肺病になつたら淸澤師のやうに篤く信じられるかもしれ

ぬと思ふた事もあるが、さりとて信を得べく肺病に熊々なる譯にもゆかず、又兩親にでもコロリと分れたら、それを動機にとも思つたが、さりとて兩親の死を待つて居る譯にも行かず、死後の心配、地獄へ眞逆樣に墮るの怖れでも出て來ればと待つて居つてもそんな心配も怖れも出て來ぬのみか果してそんな地獄や極樂がいふものはあるであらうか、恐くはそんなものはあるまいといふ懷疑こそ起れ、とても信仰の動機の原因らしいものがないのに苦しんで居つた事もありましたが今思ふて見ますれば、そんないらぬ事を思ふて居つた事こそ長いあいだ眞實の信仰を得ることの出來なんだ所以であります。所謂、道は近きにあり之を遠きに求めておつたのであります。

信せざるを得ずして信ずとは、信せんとする我よりも我をして信せしめんとする如來の本願力にもよほされて信せしめられたるなり。故に我れ信じながら、信じたる我には何の理由もなきなり。理由は我をして信せしめたる如來にこそあれ其理由とは、いはくこの四十八願なり。如來は我をして信せしめずにおかれぬわけは理由は何ぞといへば、其わけは一つや二つや三つでない。四十八通りのわけがある。理由がある。このわけあるで、お前はいやぢやといふても、是非信じて貰はねばならぬとの遣る瀬ない親心をかく四十八通りに分けて書きしるしたるが四十八願なり。

第一願の無三惡趣の願の上でいへば、今現に地獄餓鬼畜生の三惡道に墮ちて苦みつゝある我に、如來は「お前はそんな處におりて滿足しておるかはしらぬが、お前の眞實大悲の親である我は、一人子のお前をそんな處においては滿足する事は出來ぬ。三惡道の眞中におりながら三惡道とも知らぬ私に、三界無安猶如火宅お前のおるところは火の宅である、炎に包まれておるのであると、知らしめ、早く其處を脱け出でゝ我に來れよ、我に來る外に汝の苦みを脱する道はないぞよ。それゆへに唯一心に我れに來れよと呼びかけたまひつゝあるのである。故に理由

は、呼ばるゝ我れにあらずして、呼びかけたまふみ親の方にあるなり。

八、自然の信

死んでから地獄へ墮つるこの奴を
救ふ佛けと無理に信ずる
そんな無理不自然の法我どらず

聞かずにおれぬ法が眞實
死んだら無間地獄へ眞逆様に墮ち込まねばならぬ私を助けたまひてお淨土へ送も屆けて下さるのが阿彌陀如來なりと、若しも眞實に信じて居る人でありとするならば、私は其人の信仰を批議しやうとは思はぬのである。又敎へる坊主にしても眞實煮わかへる地獄ありと信じ、其地獄を脫して極樂へ連れて行つて下さるゝ佛を阿彌陀如來なりと、たしかに我身も信じ、また其儘を人にも敎へ聞かしむる

人ありとせば、私は其人をどうのこうのと裁かうとはせないのである。

唯我は眞宗に流れを汲みしが故に是非地獄ありと信じ、其地獄から救ふて下さる佛と信せねばならぬと、無理に思ふておる人が氣の毒なのと、又自分は地獄も極樂も見て來たやうに說きて翁媼をだましまはる坊主を惡くゝ思ふのである。然し私はこの惡むべき坊主と餘り遠はない說敎を、大分長く不本意ながら續けて來た事を如來と又は聽衆の前に懺悔をせねばならぬのであります。

私は自分の信せぬことを人に說くことが苦しかつたから、どうかして地獄一定と信じやう、極樂へ參らして下さる佛と信じやう、そう信せねば眞宗でない、と思ふても中々信せられない。信じられるまで說敎をせぬといふ譯にもゆかぬため信せぬまゝ心ならずも、お恥かしい說敎を續けて來ました。そうして、尙どうかして死をどりつめばならぬ。地獄一定とおもはねばならぬ。我身は惡きいたづらものとおもはねばならぬ、とおもへばおもふほど、死ぬとも、地獄とも思ふこと

は出來ませんでした。今思ひ見れば隨分いらぬ御苦勞樣な事をやつたり思ふたり、したものだと思ひます。そんなことは思はれるものでもないが、もし思はれてもそんなものは、自力の信であります。無理な信仰です不自然な信仰であります。

信せねばならぬとりきみ信ずるが
自力の信ぞ不自然の信
心にもないことといふて無理やりに
信せよといふ死んだる敎へ

九、「ねばならぬ」の撤廢

かうせねばならぬ〳〵は六かしい
せずに居られぬ造作はいらぬ

私は「ネバナラヌ」の撤廢を主張するものである。

信せねばならぬ、疑ふてはならぬ。信せずして人に法を說く程罪なことはない心苦しい事はない。故に予は信せねばならぬ。信せんとするには疑ふてはならぬ地獄極樂を疑ふてはならぬ。彌陀の存在を疑ふてはならぬ。疑ふてはならぬと思へば思ふ程疑ひは出る、信せねばならぬと思へば思ふ程信じられぬ。妙なものでないか、意地の惡いものではないか。どうすればよいのであらうか。

親に孝行をせねばならぬ。家庭は圓滿でなければならぬ。人に親切を盡さねばならぬ。何といつても金は持たねばならぬ。學問がなければならぬ。と私の周圍に百千のねばならぬがある。あまりに無數のねばならぬがあり過ぎて困る。ねばならぬといふ事はよい事のやうではあるが、事實私を苦める丈で、ねばならぬの下敷にされて押し潰される丈で、何にも私を一歩も導くものでないといふ事が今どうやらすこし思ひ知られるのである。

ねばならぬは自力である。ねばならぬと思ふて、やる事は中々苦しいものであ

る。窮屈なものである。而して又其辛い割合に効果は甚だ薄いのである。して見ると、ねばならぬといふ程割の悪い事はない。

世間の人は丸でこのねばならぬに苦しめられて居るのである。

ねばならぬ、ならぬ〳〵とあせれども
あせるばかりで其益もなし

ねばならぬは自力である。諸善萬行である。勞多くして効なき虚假の善、雜毒の行である。

このねばならぬにひきかへて、せずにおられぬといふことは何だか意氣地のない。他働的に無理にさせられることのやうにも聞こゆるが、實はなか〳〵そうでない。

信せねばならぬと思ふて信じ、疑ふてはならぬと思ふて疑はぬ。大分結構なやうにもあるが、然し、信せまいとしても信せずに居られぬから信じ、疑ふて見やうと思ふても疑はれぬから疑はぬといふのにくらべると大變の差がある。疑はぬのと、疑はれぬのとは言葉ではよく似ておるが實は天地黑白のちがひがある。たとへば嫁に行つたら姑が親じやから生みの親と同じぢやと思はねばならぬと思ふて、親でないとは疑はぬのと、生みの親も家を出たら親でないやうなものぢやから親でないと思ふて見やうとしてもそうはどうしても思はれぬ、卽ち親ではないと疑へぬとはどうでせう、餘程のちがひはあるではありませんか。前のは無理不自然の信であります。自力の信であります。後のは自然必然の信であります。他力の信であります。

よく聞けよ無理不自然は虚僞の信
道理必然眞實の信

十、せずに居られぬ

せずにおられずしてするといふことは、世間では先づ親が子を育てることであらう。月給取りや、勞働者が如何に勞をおしまず、忠實に働くといへども、皆これ報酬次第で慰勞金や恩賞金が餘計に當るとか。又一日普通二圓の勞働賃金なるに、二圓五十錢も當るとすれば仲々勉强するが、其反對に割が惡いと中々甘くは働かぬ。待遇がよいのだから働かねばならぬ。これだけの權利が與へられてあるのだから其義務として是非務めねばならぬ。義務や、ねばならぬでもすることは中々辛いものである。辛うても割でもよければよいが中々世の中にさう割のよい事ばかりはあるものでない。又割がよくても割がよいとは決して思へぬものである要するに世人のやつておることは皆仕方なく〳〵、いや〳〵ながらやつておるのであるが、唯親が子を育てる丈は義務も、ねばならぬも、算用も、報酬も、あつたものでない。五寒の師走も八月土用の炎熱も皆打忘れ、唯子の愛に引かれて所謂、

はへば立て立てば歩めと子を思ひ
我身につもる老を忘れて

で、どんな辛い事も、もの憂い事も、辛いとも、もの憂いとも思はず、どれだけの報酬を得やうとも思はず、子がニッコと微笑すると何もかも打ち忘れて仕舞ふではないか、親としては命も何も惜くはない。而して又其苦勞に對して恩賞金もいらねば、ホテルで慰勞會を開くの必要もない。それは何のためにして居るのでもない、唯せずに居られずしてして居るのみで、其して居る事、夫自身が報酬といへば報酬、實に樂しいからであります。

八萬四千の敎は、いはゞ悉くせねばならぬの苦しい敎であるが、それをせずに居られぬ身の上にならせて下さる所に信心があるのである。

信心の人を傍から見るならば狂人のやうに見ねるでもあらう。聖道の修行をして居るのだ。學者の眞似をして居るのだ、自力をはげんで居るのだ、杯といふ

でもあらうけれどもその當人としては何等の無理もない。そうせずに居られないのである。親は苦しさの餘りに、この餓鬼奴と怒鳴ることもあるが、子がニッコと一つ笑つたときには、もう堪つたものでない。吾々は苦しい中からも、淋しい裡からも、尊い力に導かれては、何事も雜作ないことゝなる。何等の苦しみもない。

善導大師は到るところ愁嘆の聲のみを聞くといはれたが、眞實に目の覺めない人間は小言許り曰つて居る。學校の先生も、商人も、坊主も、職人も、一人として、口說いて居らないものはない。何故かといふに、それ等の人は皆、人の仕業をして居るからである。蓮如上人は「萬づ參らせ心惡し」と仰せられたが本當にそうである。世間で算盤を外づした話は親が子を育てることゝ、信の人の行爲であらう。

行ずれども〳〵自の行を行ずるに非ず如來の行を行するなり。吾々は何の雜作もなく導かれて行く。それが本願であるのである。本願を信ずるとはそれであるそこに尊い導きがあるのである。

十一、本願に望めて起す信

不自然の無力の法に生命や
　力があつてたまるものかや
眞實は淨土に向ひまゐれるに
　間違ひないときめるのでない
本願に向ふてきけば信せずに
　居られぬやうになるが眞宗

無理に地獄があるからとか、極樂があるからと、見ても來ぬことを信ぜんとするのは何としても無理不自然である。

一體そう雑作もなく何時死んでも往生一つは間違ひないとか、地獄一定の此の私を極樂淨土の眞ん中へ參らせ貰ふ事のありがたさよと、本氣で喜ばれるものでない。

私の私淑する七里恒順師の仰せに「臨終をおしつめて見る時お淨土に參れるに間違ひないといふ、確かりした思ひの起るものでない。又よし、確かりと參れるに間違ひないと思はれても、其思はれた思ひで參れるのではない。なぜならば夫れは信心ではないからである」と又「臨終をおしつめてみれば一體凡夫といふものはバーッとしたものである。又眞宗の信心はお淨土に臨めて起すでない、本願の臨めて起すのである。呼聲に臨めて起すのである。死んでからお淨土へと、そんな遠い所へ望めておつては到底しつかりと明かになられよう筈がない。そんな死んでからお淨土へと呑氣な話でない。今此私一人に向つて呼んで下されてある、阿彌陀如來の切ないお呼聲に向つて安心させて頂くのが眞宗の信心である。

云云」と。如何にも達人の言は何時聞いても透徹して居る。トルストイの所謂、「眞實の宗教は今の宗教でなければならぬ。又一人の宗教でなければならぬ」と暗合するも面白い程尊い話ではないか。

眞宗の信心は本願に望めて起す信心、今現に此私を導きつゝある此の確かなる本願力に向つて、コンナ廣大なことゝは知らなんだと驚かずにおられぬ所に生きたる眞實の宗教があるのである。

一言もいやといはれぬ無理のない
此の本願を何できかぬか

如何に巧みに言葉を弄しても、冷靜に考ふるときに馬鹿らしくなるものに何で眞實があらうか。死んだら極樂へ伴れて行つて貰へる御本願なんどいふことは無理壓へに壓へつけたものである。不可思議の本願のオシカケは、毫末も說く所がない。

本願の本願たるは之を聞けば、いやといはれない所にある。恰も子供が段々と發育する樣なものである。我々は本願に接しては段々と進まずに居られない、所謂信も增上し喜びも增長するなりである。其處に本願の尊さがあるのである。之れ迄ざつと、本願は二尊の本懷、大經の生命、聖親鸞の神髓、自然の信、不自然の信杯に就て述べましたから、愈々本願とは何であるかに就て話しませう。

十二、本願とは何ぞや

本願はみ親の心おん誓ひ
　　眞實自然お慈悲招喚
本願は本來自然宇宙意志
　　天地のまこと無聲の聲ぞ
我心泥棒心出來心
　　うそといつはり無悲悲橫着

本願とは文字の上から問ふと本とは本來とか根本とか本眞とか續く文字であり願とは願心とか志願とか願望とか續く文字故、本願とは卽ち本來の願望、根本志願又は本眞の願心といふ程の意味を含む文字で少し理窟的にいふならば、本來、自然に宇宙に充ちて居る意志であるともいへる。又彼の孟子の所謂「誠は天の道なり、之を誠にするは人の道なり。」とある「誠」とか「天道」とかいつたやうなものだともいへる。本願を或は本願一實の大道ともいふからである。一實とは誠である大道とは卽ち天の道である。又此本願を信ずる事は孟子の所謂「人の道」である。信心獲得すといふは第十八の願を心得るなりで、願を心得る卽ち本願を信ずることは、天の道たる誠を人の上に實現することである。此本願を信ずることは、信心を獲得する事は、人間の道である、人としての最上の事業である。人間としての唯一の道であるともいへる。此れは孟子の語の上で一寸說明したので

あるが、要するに本願とは、おこゝろである。御親の心である。阿彌陀様の願心である。

此如來の願心、おこゝろは、横着な泥棒の様な我等の心とは違ひ本眞の眞實の至誠の心であり、又ほんの一時的な出來心にも似たる我等の心とは違つて、本來法爾として無始已來變らぬ通り拔いたお心である。又上べの欲望や無慈悲な我等の心に引きかへて、如來のお心は根本的の願望であつて、如來の裏心よりあらはれて居る願心故又我等の裏心に滿足を與ふる大慈悲の心である。

十三、有聲の聲、無聲の聲

此本願、お心が、現實に我等の上に聲となつてあらはれたのが南無阿彌陀佛である。此南無阿彌陀佛は、我等の口に稱ふべく出來上つた有聲の聲であるとすれば、此本願は其有聲の聲の中に潛む力の無聲の聲であるともいへる「佛の聲」の

お前のきたない、口をかり、
そのまゝまかせと、呼びたつる（有聲の聲）
切ないおれの、胸の中、
聞いてくれぬか、きこねぬか（無聲の聲）

は、有聲の聲、無聲の聲である。

莊子は「有聲の聲は百里に如かず、無聲の聲は天地に響く」といふて居る。眞にそうである、百雷一時に轟くとも迚も百里は聞ねぬ。この本願の名號は無聲の聲ゆへに正覺大音又名聲聞十方と全宇宙に響くのである。

無聲の聲たる本願は天地に響く聲ゆゑに、英國へ行つても米國へ行つても變らない。又何千年の昔も何萬年の末になつてもすこしも變らぬ聲である。所謂横に十方竪に三世を貫く聲である。

或人が「第十八願に十方衆生とあれど、實際は佛教は世界のほんの一部にしか

弘まつて居ないのは、どういふものか」と問はれしとき私は、それに答へて「それは貴方は、佛法と佛教の區別が御分りがないから其疑問が出るのであります。佛教は三千年の古へ、釋尊初めて說きたまひしものにて、今世界の一部にしか弘り居らねども、佛法は釋尊の說き玉はざる無始の昔より、全宇宙に滿ちて居る自然法である宇宙意志である、無限の力である。無聲の聲である。此法を發見したのが釋尊である。其の法を釋尊の言葉で說きたるが佛教である。佛法は釋尊、發見こそしたれ。發明したるにはあらず。第十八願は本願である佛法である、故に十方衆生と呼びかけたまひたるなり云々」と申した事があります。

兎に角、本願は天地に響く無聲の聲である。先達書いた、大正二河響の歌に、

此六字天地に響くお呼聲
何を恐れてグズ〳〵しどる
大膽に脇目をふらず進みゆけ

そこに我行く道は開かる

といふのがそれであります。

其無聲の聲たる本願其儘あらはれたのが此の南無阿彌陀佛の呼聲なのであります。

十四、何故に本願起りしや

こんな本願が何故に起つたか。御和讃に「如來の作願をたづぬれば、苦惱の有情をすてずして、廻向を首としたまひて、大悲心をば成就せり」とあり、何故の本願であるか誰のための本願かといへば、此私一人のためであるのである。苦しみなやむ私が居るゆへに、可愛と思召し、其苦惱より我を救はんとの本願が起されしなり。

曇鸞大師が論註の中に一願毎に、佛、本と何故に此願を起したまへりやと問ふ

て、其願の起る所以を説明して居られるが、其筆法で佛本何故に此本願を起したまへりやといふに、即ちその如來の作願をたづぬるに、それは、苦惱の有情たる私ゆゑにであります。何故に我々は苦しむのであるか、いはく之を説明したのが前に書いた

我心泥棒心　出來心

うそといつはり無慈悲横着

であります。之が本願の起る所以であります。

おれさへよければ人はどうでもよい、人をつき倒しても自分丈よい事にあはうとばかり思ふて居る泥棒のやうな心を持て居るから苦しんでおるのであります。誰れがさうオメオメとつき倒されるものでありますか。又一時の出來心のやうな惜しいとか欲しいとか憎い可愛どいふやうな心のみに引きづり廻されて、遂に自己の本心さへ顧みる餘裕もないから苦しむで居るのであります。又人をあざむき自己を欺き、うそと偽りばかりで苦しんで居るのであります。又自己は慈悲もなさけもない癖に人の慈悲となさけを欲しいやうな横着な心をもつておるから無始劫來今に至るまで、苦しみなやんで居る所以なのであります。

こういふ淺間しい心を以て苦しみ惱んで居る私のためにおこし下されたのが如來の本願であります。

十五、本願相應と不相應

本願に相應すれば理にかなひ
快樂安穩極樂淨土
本願に相應せずば理にそむき
苦惱狂亂地獄修羅道

相應とは信ずる事である。本願相應とは本願を信ずるなり。本願を信ずれば快

樂安穩、心は淨土、本願を信せざれば苦惱狂亂心は地獄。信と不信は地獄極樂の分水嶺である。さかひめである。正信偈には、

生死輪轉の家に還來することは、決するに疑情（不信）を以て所止とす。すみやかに寂靜無爲の樂に入ることは、必ず信心を以て能入とす。

とあるはこれであります。

本願に相應すとは本願を信ずること、本願を信ずるとき本願、卽ち如來の御心と吾心と一體になるなり。之を相應すとはいふなり、御文章に、

不思議の誓願力ぞとふかく信じてさらに一念も本願をうたがふこゝろなければ、かたじけなくもその心を如來のよくしろしめしてすでに行者のわろきこゝろを如來のよき御こゝろとおなじものになしたまふなりこのいはれをもて佛心と凡心と一體になるといへるはこのこゝろなり。

とあり、救ひといふもお助けといふも實は此佛心凡心一體になるの境地をいふのである。卽ち本願と相應することであるのである。

然らば其本願に如何にすれば、相應するか、つまり如何に信ずべきかといふ問題である。本願に相應するとは、こうしてあゝしてと考へて工夫して相應するのではなく、向ふから私に相應するやうな本願をこしらへて、この本願にすがれとある。所謂先手かけての勅命に唯すがればよいのである。故に本願に相應すとは本願が私に相應して下されてあることのたうときを唯いたゞく事であります。

故に御文には、

眞實信心をわたる人いたつてまれなりとおぼゆるなりそのゆゑは阿彌陀如來の本願のわれらがために相應したるたうとさのほどもみにはおぼへざるがゆゑに等

とあり、私より本願に相應するにあらずして本願がすでに私に相應して下されてあることを信ずるばかりである。之を本願相應といふのである。御和讃に、

利他の信樂うる人は、願に相應するゆゑに敎と佛語にしたがへば、外の雜緣さらになし。

とあるもの之れである。信心をいたゞく事から其本願に相應したのである。其信心も私より起す自力の信でなくて如來御廻向の他力の信心ゆゑ利他の信樂とのたまひしなり。

十六、本願と我心

本願は天地のまこと之れ自然
　水の低きに流るゝ如し
我心みんな不自然無理ばかり
　火から水でも出さんと思ふ
本願を信ずる心これ自然
　まことの法にかなふ道なり
我心信ずる故に無理ばかり
　まことの法にそむく道なり

お慈悲のないときは本願なんか如何にも不自然な神話でも聞くやうだが、お慈悲を聞くやうになると、本願とは誠に自然のことゝなつて來る。今現に導かれつゝあるまゝの活きた寫眞ともみらるゝ位である。誠は天の道なり、之を誠にするは人の道なりで、少しの無理のない所が彌陀のおはからひである。

我心みんな不自然云々とその次の歌とは、本願と我心との關係に就ての布演である。吾々は火から水でも出すやうな不自然な無理な事ばかりおもふておるものである。所謂人間の僥倖心の如きは夫れである。僅かばかりの資本で大儲けをしやうといふところから賭博や米商をやつて囚れの身となつたり丸裸となつたりするのである。遊んで居て大儲けをしやうといふ僥倖心が、お慈悲を聞く上にも現

はれて、遊び半分、冷かし半分に聞いて居て、而して其曰くだが、どれだけ聞いてもなんで聞わぬやうもないもんだ。又自分達の間違ひだらけの心の中から金剛堅固の信心でも掘出うと思ふたりする。信心を頂くといふことは、つまり此夜中に金でも拾はんとしたり、晝間の化物でも見やうとするやうな心を差しあげてしまふことである。

本願を信ずるこゝろこれ自然とは、信は願より生ずれば念佛成佛自然なりといふことで、我々は心の底より彌陀のお力を求めずに居られないやうになる、それが自然である。出來心の概念的な信でなく、信せずに居られないやうにしむけられたる、大願業力の佛の心に依つて信ずるのである。それこそ、本當のものである。本當の信心である。

それに反して、我心信ずる故に無理ばかりと申したのは我心を信じ本願を信じないのは、誠の道に反くことになるのである。世間では、全く自分の思ひを本として、唯己れさへよければ人はどうでもよいといふのが本心である。然るに、そういふ本心であるといふことは、夢にも見せず、家のため村のため社會のためとばかり見せかけて居る。かゝる連中の寄合が世間といふものである。心口各異言念無實である。見せかけである。偽善である。無理である。不自然である。誠の法に背いて居る。

諺にも金持と痰吐はたまればたまる程きたないといふ。又雪道と金持は積れば積る程道を忘るゝともいひますが、豈獨り金持のみならんやです。智者も學者も德者も事業家も皆進めば進む程却て道に遠かつて行くばかりである。ます〳〵偽善に偽善を重ね行くばかりであります。少しも眞實の道や眞の幸福には近づき得ぬのであります。

そこに阿彌陀樣の呼聲が一生懸命である。聲をからして呼んで居られるのである。東に向ひて遁みつゝある私に汝かへり來れ其道行くべからず。汝一心正念に

して我れに來れと呼びかけたまふなり。この呼聲こそ本願其儘が聲にあらはれしなり。

十七、眞實と虛僞

本願に相應せずにはからふて
　心に任せてゑらい御苦勞
本願は一筋道の御はからひ
　わがはからひは諸善萬行
本願は自力諸善の小路より
　一大道に導かん爲め
本願をそしるともがら生盲（闡提）
　ながく三塗に沈むといへり

我心自然にそむき理をまげて
　非をとげんとて苦しみ迷ふ
樂をして金をもうけてあばれても
　ほめられたいがわしが心よ
麥まいて米がはゑぬといふよりも
　猶無理多き我心哉
出來ぬこと許り思ふて出來ぬとて
　またあばれ出す泣き面の蜂
不自然に不自然かさね無理かけて
　ベランかけ引果ては分產
一國の王にそむけば大逆ぞ
　ぬすど泥棒火付けせずとも

法王の彌陀にそむけば大惡ぞ、
王法仁義諸善具すとも

こう書き列べるのは少しくどい樣で當前の學問の爲めならば、かくまでせんでもよいが今ぞこゝに眞實の大關と僞の大關との大角力をお目にかけたのである。本願と私の心とが天下の兩大關である。その意味に於て四十八願は廣大な興味のあるものである。本願に相應せずに、はからうてとは相應とは仰に從ふことである。吾々といふものは彌陀の仰せに從ふ奴でない。一寸從つた積りでも、それは自分の心丈に從つて居るのである。人造の親樣に從つて居るのである。ご苦勞樣をやつて居るのである。はからひやめて彌陀たのめで、眞宗の安心とは此外に何にもない。はからひやめるとはどうなるのか、聞いて初めてやまるのである。やめやうと思へば思ふほどなほやむものでない。御一代聞書にも我心に任せてはさてなりと仰つてある。「さてなり」とは不可の意味です。ぞべ〳〵の連中は任せたお任せしたといふが、あれは任せたのでない。ほつぽかしておくのである。拾ひ手がない。死んだら往生一つは阿彌陀樣に任せると言葉は立派だが、そのやうなきたないものを任されて阿彌陀樣も困らつしやる。そんな死骸は三昧へ持つて行つて燒く丈けのことだ。ゾベゾベの人のみでない。お慈悲を聞く段になつてからが、あれもおしかけ、これもお慈悲お他力にお任せしてといふのも口先き丈のものは何にもならない。阿彌陀を疑ふては罰が當るといふのは疑はれぬと疑はぬのである。眞宗は疑はうと思ふても思はれないお仕掛けに會ふのである。姑を親と思はねばならぬとは無理である。姑は姑としたなりで嫁は嫁なりでよい。嫁々しい心をうち融けなさいといふのは、無理である。吾々は本願にはからはるゝ丈でよい。我心に任すではない。少しもそこに、こうせねばならぬといふことはいらない。親子ならば親子と思ふ世話さへ要らぬ所に親子があるのである。本願に會ふて切るに切られぬ親子とさせて下さるゝのである、親子といふさへもい

けない。聞かす彌陀と、聞かんとする私とが、一體になるのである。次ぎの本願は一筋道の御はからひわがはからひは諸善萬行、阿彌陀樣の本願は私をば、ちやんとかうしてやらう、あゝしてやろうといふ、見當がついて居るのである。親樣の方で淨土の眞中迄も引張つて行く丈の算用が定つて居るのである。それを我々が、あゝもこうもと計らうのは、まるで親樣の御心を妨ぐるにすぎない。一體我々は善といふ字に大に惑ふておる。世間の善は相對善であつて、ねばならぬの性質である。國家の爲めに、あゝせねばならぬ。社會の爲めにかうせねばならぬ。家庭の爲めにはこうといふが、家庭の爲めと國家の爲めとが、どうして衝突せずに居られやう。所謂一方立つれば一方がたゝず、兩方立つれば身がたゝずで實際となると、事々物々大に惑ひなき能はずである。そんなに惑ふて迷ふて居る吾々を導いて下さる、一筋道を行かして下さるのが本願である。どうすれば善かどうすれば不善か、そんなことは一切詮索するに及ばない。わがはからひは諸善

萬行である。我々は、まるであゝせねばならぬ、せねばならぬことのみが多い。而してその結果はどうであるか。あなたがたが病氣にかゝるとき、病そのものよりも氣をやむ方が多い。それが大變に病を手傳して居る。大晦日に忙はしい、忙はしいといつて氣許りせくでないか。そのくせ仕事がちつともはかどらない。我々は正月の元日から大年迄、せねばならぬに、うづまつて居るのだ。本願は一筋道のおはからひで、唯その一筋道に導かれて行くならば、今迄ねばならぬと氣を張つて居つたよりも、數倍數十倍の働きをなすことになる。本願をそしるともがらを盲目としましたが、之は御和讃に

本願毀滅のともがらは、生盲闡提となづけたり。大地微塵劫をへて、ながく三塗にしづむなり。

とあるのがそれである。

我心自然にそむき理をまげて非をとげんとて苦しみ迷ふ。といふのは、我々の

やることは凡ておれでなけらねばならないと、誰れも彼れも其處許りに力んで理があつても曲げやうとする、曲つて居るに係はらず、それを通さうとする。惡いと判りながら、やり通さうとする者ばかりである。隨分と勝手なものでないか。

樂をして金をもうけての心である。かういふ人間許りである。それであるから厄介である。泥棒が監獄へ入るのは、そんなやうな樂をしたい、金をもうけたいの根性の結果に外ならない。本願とは之を救はんとの、生きたお仕掛けであるのである。

麥まいて米がはゐぬといふよりも無理多き心かなで、我々のは麥まくのなら米だよいが塵を蒔いて米をとらうとするのである。その種を見ればお座へも出せやしない。踏みつぶされても足らぬものだ。そのやうな奴でありながら此俺をだらにして居るとか曰ふて、りきんで居る呆るゝの外はないでないか。

出來ぬこと許り思ふて出來ぬとてまたあばれ出すで我々は出來ぬこと許りを相談して居るでないか、善惡はあざなへる縄の如しで、例へばこゝに優しい嫁が居るとせんに姑は嫁が優しいものだと喜べばよいがそうは言はぬ。あの愚圖愚圖が一日でよいことを三日もかゝつて居るといふ譯で矢釜しくいふことである。凡て反對反對と思ふもので、その癖自分の殘酷なことには氣がつかず、自分は活潑で元氣でといふ工合だ。亦若し元氣な嫁がありとすれば、あいつは亂暴だ生意氣だといつて批難するであろう。我々の心といふものは梅の香を櫻に持たせ、といふやうな無謀なことを思ふて居る。出來ないことを思ふて出來ぬ出來ぬとて腹を立てゝ許り居るでないか。おとなしいとは愚圖といふことなり、姑は活潑だとご自慢をなしつゝ嫁を愚圖だと意地目てかゝる、どづちを取ればよいか判らない。出來ない出來ないといふてあばるればいよ〳〵泣き面に蜂やら吹雪倒れに水をかぶせるやうなものであつて段々と惡くなつて行く許りだ。

不自然に不自然かさねといふ如く、我々のやることは全で遣り繰り算段の商人

と同然である。我々は早晩分產せねばならぬ。地獄一定だ。病氣にかゝつて愈々助からぬといふ。そういふ段になつて如何しやうかと氣がつけば、もう遲い。鳥の死なんとするやその聲悲しで、可愛想だが仕方がない。悲んでも何しても、もう遲い。吾々は今日に於て早く、到底分產したがよいと執達吏を向けて勸告されるようになつたとは仕合なことである。こゝに大破產をやつて、お慈悲につれられて行くやうになつたのであるまいか。一國の王に反けば大逆ぞ、とも曰ひましたが畏多いことですけれども、日本の國で一天萬乘のお天子樣に反逆する程の大罪はない。先年幸德秋水といふ日本人としても學者であり德者であつた人が大逆無道として斬罪に處せられましたでしよう。秋水は盜賊でも詐僞漢でもなかつたが何よりの大罪を犯したのである。普通人々は自分は泥棒もせず盜人もせぬ。だから惡い人間でないと自ら慰めて居るは憐むべきでないか。日本人として大逆罪を犯しては一日も日本に生きて居ることは出來ない。今彌陀の本願に背くとは大逆罪であると申すのである。命の終る迄、苦しまんければならぬのは當り前である。吾々は無始劫來、如來の本願に支配せられないでは一刻も存在されない。我が眞宗にて惡人女人といつてあるのは何も盜人泥棒のことでない。法皇の彌陀に反いて居ることをいふのである。阿彌陀樣に反いて居る所に惡人が成り立つのである。人並以上の王法仁義が揃ふて居つても、秋水の如きは國王に反いてあの結果を來したのである。その反對に假令吾々は泥棒でも惡人であつても本願に從ふときは悉く罰を免される。國家の大赦に會ふと同樣である。それが自然である。本願一實の大道に進ましめらるゝ吾々は實に快樂である。安穩である。本願に入つた人は何といふ仕合であることでありませう。

十八、佛心凡心一體

謗法は五逆十惡よりもまだ

重き罪とは此いはれなり
恐ろしや因果撥無の外道とは
人様でなし此わしのこと
提婆にもまさる惡人此わしを
命せ一つで救ふ願力
本願と我の心と今こゝで
一つになるを信心といふ

先達て寺で論註の八番問答の話を長々と致しましたが、それは謗法罪のことでありました。その事を傳へ聞いた、人達の惡口が笑止しい。あの坊主、何を言ひ出したのだ。自分の事を謗る奴を地獄へ行くといふのか、娑婆中のものが地獄行だといつて居るといふやうな評判だつた。八番問答で說いた謗法罪は、そのやうな低い話でない。天下の謗法の罪人は他人のことでない。私一人である。曇鸞樣

は論註で叮寧に說かれたが、十惡といふは、殺生偸盜邪婬等である。そんな罪よりも僧侶のことを少し位そしつたからとて何である。といふのが我々の低い頭の考へ樣である。五逆罪は十惡の上で越す重い罪である。盜人をやるよりも僧侶を迫害するの罪は重い。普通の殺人より僧侶を傷つけるは重い。今日の刑法でゞも父母を殺すは殺人中の重い罪とする。父母を殺したりする五逆の罪よりも重いのは謗法である。自分の考を本として徒らに人のいはんとする所を謗るでない。何も泥棒や詐僞を罰するやうに刑法に問はんとするのでないが謗法の者を矢釜しくいふのは、その罪を免れぬからである。謗法は丁度、天子に背く罪のやうである。宇宙の眞理に反くのは最も重いのである。

恐ろしや因果撥無の外道とは、といひましたが、提婆をば因果撥無の外道といひます。提婆は自らの見識を基として今日の科學者が未來や極樂といふことを一概に排斥する如く因果を無視したのです。眞實の法を說くものを誹るのは、假令

刑法には、どうことなくても長く長く罰せらるゝの事は明かである。本願に從ひ本願に相應するならばこゝに我々の胸に極樂の出店の出來るといふことは、當然である。本願に相應せずしては、その反對に地獄の出店が出來て居るのだ。それは誰が見ても明かである。さういふ因果をなみするのであるから大罪である。提婆といふは普通の惡人でない。當時の大學者大智識であつた。唯根本に於て眞理に徹せざりしを以て釋迦に反抗したのである。ところがその提婆といふ外道は昔の提婆の事でない。私自身のことなのである。貴方々も私も朝から晩まで三毒五欲の息を吹き散らして居るものである。恐るべきものでないか。毎日毎日出來ぬことばかりを言つて怒つて居るとは、恐ろしいものでありませぬか。そんな不道理は、世界を汚すことは當り前でありませぬか。

提婆にも勝る惡人このわしを、と私を呼んで下さるその仰せ一つを聞くことによつて、私の凡ての罪が消ねるのみでなく、あらゆる功德の凡てをお與へ下さるのである。蓮師もされば無始已來つくりとつくる惡業煩惱をのこるところもなく願力不思議をもて消滅するいはれあるが故に正定聚不退のくらゐに住すとなりと仰せられました。尊いことです。その不思議力が信せられないから、八番問答の初めにもたとへば、千歲の闇室に光もし暫くいたれば、すなはち明朗なるが如しといふように巧妙の例をせられた。つまり彌陀如來がその罪人の罪を悉く自分に引き受けてやると仰せらるゝのである。

本願と我の心と今こゝで一つになるを信といふなり、とは機法一體佛凡一體をいふたのであります。信心は彌陀の心と私の心と一つになるに非ざれば信心ではない。遠い未來へ行つてからでない。今茲で一體にならねばならない。死んでからではない。今迄は本願と私の心とを二つにして對照して來たのであるが、こゝへ來て一つになつてしまうのだ。合資會社よりも一層固まつたものとなるのである。此私が鬼であつて佛であつて、間違通しで間違はぬといふ妙境に入る

のである。宗教の三千年來動揺しない、その原動力は、こゝにあるのである。汚い心全體が清淨な如來の願心と一體となる。安心決定抄には「佛身を見るものは佛心を見たてまつる佛心といふは大慈悲之なり、佛心はわれらを愍念したまふこと骨髓に通りてそみつきたまへり。たとへば火の炭におこりつきたるが如し。はなたんとするともはなるべからず」と喩を引いて述べられてあるが私のこの三毒五欲が光明に照らされて、智慧の光を現出するといふ、不可思議の事が實現せらるゝのである。

十九、四十八願分類

最後に四十八願全體に亘りて其組織に關する話を致します。

四十八願に就て古來の學者は種々に分類して居られますが今二三をあげませう

淨影大師の三分類といふのがある。善導大師も、我宗祖も共に一應お伺ひになつた所のものであります。

淨土、法身、衆生

攝淨土（三十二）攝法身（十一、十二）と攝衆生（他ノ四）

これ本願の三種分類

淨土と佛とに關する願は五願しかないのに、吾々衆生に係はるものは、實に四十三の多きを數へる。それを以て見ても我一人のことにかゝはり果てゝの本願であることを伺ふことが出來るといふものである。十七願の如きも如來のことであるも諸佛が如來の御名を讃めるのを衆生が聞いて信ぜずばといふ譯のもので、皆我々のことに關して居るのである。之は文字の上よりの形式上の分類でありますが次ぎに願を分ちて根本欣慕とすることをいひませう。

十八は根本の願他は之を

根本欣慕

信せしめんが爲めの願なり

之は法然上人が言はれた分類である。善導樣も其方であつた。子供に高岡の曳山を見せてやらうといふのが、おやぢの本願であるとするも、子供は山とは何だか判らないから高岡へ行けば獅子があるかといへば、獅子もあるぞ、天狗の面もあるぞといつて子供をおやぢが、かつひで來るであらうが、獅子も天狗の面もあるが目的はそれでない、曳山を見せたいのである。欣慕といふのは、あの人のやうになりたいと思はせるのである。

眞假分判

法然上人はかうであつたが、御開山になると見方が違つてしまつた。誠に前代未聞の見解、四十八願について眞假分判をなさつたのであります。

我宗祖四十八願のその中に

眞假を分ち五願八願

米は米、麥は麥と別けられた所に御開山の功績があるのである。

眞實五願

十一と十二十三十七に

十八願が眞實五願

こゝに我眞宗の信仰と教義とが出て來たのであります。

眞假八願

此五願十九廿と廿二を

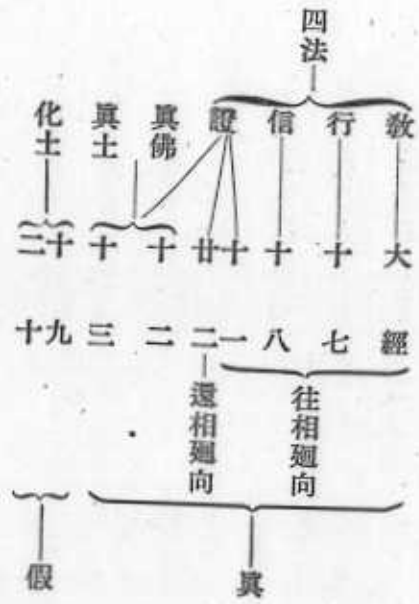
加へて眞假八願といふ

本書本願

本書では四法三願二種四願

六法五願眞假八願

眞假八願の中二十二願は還相廻向であつて眞假の中の眞の願である。



說願次第

次ぎに說願次第といふことを述べますが、說願次第とは、四十八の願に順序があるかどうかといふに之も歌にして見ますれば、

本願の次第は拔苦與樂分

攝諸衆生と種々利益分

四十八を三分して十六宛としますと第一番の十六願は拔苦與樂の願であり、次ぎの十六個の願は進んでお前と俺とは親子だと親子名乘りをするのである。親子の契を結んで下されよと私にすがりついてくださるのである。それから、終りの十六の願で、かうもしてやりたい。あゝもしてと曰はるゝのである。

二十、今得る淨土の德

本願の組織については大體述べましたのであるが序でに左の諸事に就て述べん

本願成就

阿彌陀佛四十八願成就して

賴め救ふと今現に呼ぶ

本願の生起

本願の本の起りを尋ぬれば
苦しみ惱む今の我爲め

一々願言

一々の願は皆是今我に
任せ救ふと呼ぶ親の聲

六字本願

四十八數々あれどつゞむれば
南無阿彌陀佛と我を呼ぶ聲

淨土の德

證文に淨土の德を求めぬに
信ずる人に得しむといへり

八ケ條の御文にも仰せらるゝやうには「衆生佛にならずばわれも正覺ならじと

ちかひましますときその正覺すでに成じ玉ひしすがたこそいまの南無阿彌陀佛なりと」ともあり、四十八の願は願捨てゞはない。彌陀は本願の佛である。それが今本願力として願し玉ひ、その願の成就せらるるのである。帖外和讃には「四十八願成就して正覺の彌陀となり玉ふ。たのみをかけし人は皆、往生必ずさだまりぬ」とあり亦、「本願力にあひぬれば、空しくすぐるひとぞなき」とありまして彌陀の戸籍を見て來ないでも、彌陀を頼まん人には、必つと救ひを求むる力となつて顯はるゝのである。卽ち阿彌陀佛四十八願成就して今現に呼ぶのである。阿彌陀經には、從是西方過十萬億佛土、有世界名曰極樂其土有佛號阿彌陀今現在說法とあります。之を聞いて居つて分つたのは智惠第一の舍利弗一人であつたが十劫の昔に居られた所の彌陀如來が今現に說法し玉ふといふのであり、途方もない事を言つたものである。極樂といふ十萬億佛土の向のものが、今現に茲にあるのである。時と處とを超越したのが小經の說相である。本願の生起といふのは、

今現に苦しんで居る、此私が本願のおこりといふのである。トルストイは宗教は今の宗教でなければ本當でない。私一人の爲めならずば何にもならぬと叫んだが、蓮師も今の阿彌陀佛と仰つた。そこに願力の成就し玉ひしことが明かとなる。

次に一々願言といひましたが善導大師はかの玄義分に「四十八願をおこして一々の願に若しわれ佛をねたらんに十方の衆生我名號を稱して我國に生せんと願せんに十念に至るまで若し生せずば不取正覺」と第十八願が四十八願の何れにも誓ふてあると面白いことを言はれたが之を總の十八願と別の十八願と稱するのであります。善導大師の信仰にあらずんば出來ない見識である。第十八願は別の十八願で父子ならば父が子に財產を讓渡すといふ手續の登記所である。そのやうに身代の切りかへをやる迄も全く財產をやらぬのではない。着物も着せてやつて居た。足袋も買つてはかしてやつた。饅頭一個にしても親の慈悲が籠つて居る。親の慈悲全體がこもつて居るといへやう。一部でなくて全部である。我々は指先を切つて之れは自分の生命でないから、どうでもよいと言つて居られない。指の先きにも命がある。四十八願の第一より第四十八迄悉く彌陀のお慈悲があるのだこれが善導大師の四十八願の見方であります。更に具體的に我々に本願がどうして下つて下さるのかといふに、六字本願である。蓮如上人は御文に「夫、五劫思惟の本願といふも兆載永劫の修行といふもたゞ我等一切衆生をあながちにたすけ給はんが爲めの方便に阿彌陀如來御身勞ありて南無阿彌陀佛といふ本願をたてましまして」と申された樣に四十八願全體が南無阿彌陀佛の六字に入つてしまふのである。六字御名號に阿彌陀佛の慈悲も智慧も悉く入つてゐる、故に一願をも知らいでも六字にこもつておるから六字の名號を稱するばかりで何も要らないのだ足元を見るな、胸ながめてくよくよするな、六字の御本願があるでないか。それでもう澤山なのであるぞ。次ぎの歌に淨土の德といふ名を付けましたが御開山

は一多證文には「安樂淨土の不可稱不可思議の德をもとめず知らざるに信ずる人にねしむとしるべしと」の言である。現生正定聚の敎である。信ずる一念の立ち所に淨土で頂く德をこゝで頂かして下さるのである。私が四十八願を講義して講ずるお淨土は說敎者のいふ淨土と違ひます。私は信ずる一念の立ち所に私の胸に現はるゝ淨土を說明するのである。私が見て來た經驗のお淨土を說くのである。現生正定聚の德を蒙つたその儘のことを申し上げるのであります。

之で石かち丈はすみました。これからが建築にかゝるのです。充分に納得の出來ぬ了解されぬ方もあるであらうが一體信仰は信仰の口と耳とありて初めて、お慈悲のことがうかゞはれるのである。(終)

警句集（附錄の二）

○

自己の落付き處を見出し得ないことは、最も悲慘な苦悶でなからうか。

私達は現在の境遇に出來る丈滿足の思を以て行かう。凡ての人凡てのものに感謝して行かう。(自己の價値)

○

如何なる大災難も逢することの出來ぬ處に居る思想は少しはある。

幸福と悲哀とは外部から來るやうに思ふ時でも、實は我々自らの中に存在する。

迷と悟とは裏と表である。幸福と不幸とは紙一枚の隔てさへない。

自分で幸福であると眞に思ふ人こそ本當に幸福なのである。

信仰と生活の一致は中々六かしい。